

政治的なものの変容

——グローバル化と総力戦体制の黄昏——（一）

升 信 夫

はじめに

政治と暴力については、H・アレントに典型的に見られるように、カテゴリカルに異なるものと捉えるのが、近年では一般的となっているように見受けられる。アレントは力と暴力は、必然が支配する私的領域の特徴であり、公的領域とは無縁であるとして次のように論じている。

「政治的であること、ポリスで暮らすことは、全てのことを力や暴力ではなく、言葉と説得によって決定することを意味した。ギリシアでは、暴力で人々を強制すること、説得ではなく命令することはポリス外の、つまり家族での生活の特徴づける、前政治的な対人関係のあり方であった。⁽¹⁾」

また、M・I・フィンリーは、政治的なものと軍事的なものを区別することの意義を説き、アテナイでは軍事的な

リーダーと政治的なリーダーが峻別され、政治が軍事的なものをコントロールしたのに対して、共和政末期のローマでは、軍事的な指導者が政治的力を持つようになり、それが結局のところ共和政の終焉をもたらしたと論じている。⁽³⁾ 政治と物理的暴力とを、このようにカテゴリーカルに区別してゆく姿勢は、近年の審議的民主主義論にも継承されている。審議的民主主義論は、貨幣を介した経済的な関係や暴力ではなく、言葉を介したコミュニケーションこそが政治的手段であると論じつつ、一方で市場（＝経済）の支配力が増し、そこでの決定が政治をはじめとする他の領域に無条件に移入されてゆく状況、また他方で、現代の肥大化し官僚制化が進展した国家制度を批判的に捉え、真に政治的な諸関係を再生することの重要性を説く。政治的な思考から軍事的なものを敢えて捨象する、これらの考え方、感じ方は、戦時社会から半世紀以上が経過し、また徴兵制度も廃されて久しい平穏な日常生活を生きている日本の私たちには、特に違和感をもたらすものではない。

しかし、政治と暴力的なものとの峻別は、これまで長らく、あるいは現在でもなお、政治が暴力的なものとの関係を濃密に保ってきたことに対しての抗議という側面を持つている。今現実に政治と暴力が関係を保っているからこそ、両者は別だという言説は意味を持つ。実際に歴史を振り返ってみれば、政治的事柄と暴力とは極めて密接な関係にあつたし、またその伝統を私たちも大なり小なり無意識に継承している。例えば司馬遼太郎の歴史小説を繙いてみよう。司馬は、幕末、長岡藩の家老であつた河合継之助を主人公とした『峠』の中で、主人公に次のように語らせている。

「人間のいのちなんざ、使うときに使わねば意味がない。…(中略)…いま徳川家は危機に瀕しておる。三河以来の譜代におわす牧野家の御当主としては、この時敵地へ乗り込み、このとき陳弁せねば、なんのための譜代であらう。世々七万四千石の御禄をいただってきたのは、この一日のためにある。男子とはそういう一日を感じう

る者をいうのだ⁽³⁾」

ここでは、自らの命をすすんで暴力的状況の中に投げ出すことが、美しく感動を与えるものとして描かれている。時に臨んで偉業のために命を賭けるというこうした決断の場面は、司馬作品の随所に描かれ、また公共放送にも映像化され、多くの人々を魅了してきた。叙事詩の重要な機能の一つが、自分個人より大きな集団、共同体の存続に関わり、すすんで暴力に身をさらすことを美しいものとするメンタリティを育むことであれば、司馬作品は、日本におけるそうした叙事詩の伝統の一翼を担っているし、その作品を読んで面白いと思う時、読者である私たちもその伝統の更新に寄与している。⁽⁴⁾目を西洋に転じれば、そうした叙事詩的伝統としてしばしば挙げられるものにトウキュディデースが『戦史』で描く、葬送の場でのペリクレスの演説がある。ペリクレスはポリスの理念を語りつつ、「人の世の仕合わせとは、死すべき時には、あなたたちの子どもらのように、死にふさわしい至高のいわれをもつこと」であると、子を戦争で亡くした親たちに説いている。⁽⁵⁾

だからこそ、政治と暴力、軍事的なものとの間に密接な関係を認めることは、ウェーバーの諸著作に見られるように、通説的な位置を占めてきた。ウェーバーは、『職業としての政治』の中で、政治団体として国家の本質を物理的暴力の行使に求め、「手段としての権力と暴力性」こそが政治であると論じた。また、私たちは、政治と暴力を峻別したアレントでさえ、『人間の条件』において、古代ポリスの政治について語りながら、次のように述べていることを忘れることはできない。アレントもまた、政治に関わる時には、命を投げ出す用意が必要だと考えていたのである。

「政治的領域に入ったものは誰でも、自分の命を賭けるという用意がまず必要であり、あまりに命に恋々とする

ことは奴隷の徴であり、自由は損なわれた。」⁽⁶⁾

あるいは、政治と暴力、抑圧との密接な関係は、フーコーの一連の著作でも中心的なテーマとなっており、フーコーは、『監獄の誕生』『狂気の歴史』などの著作で、病院、監獄などの装置を通じ、紀律化という形で権力が発揮されることを明らかにした。フーコーの着想は、学校、家族、宗教などを国家のイデオロギー装置と捉え、それらを通じて広く調教が行われていると断定した、『再生産について』のアルチュセールの分析とも重なり合う。更に、歴史過程を振り返ってみれば、政治的なものと、暴力的なもの、軍事的なものが密接な関係を有していたことは自ずと明らかになる。そうした関係を簡単に辿りながら、本稿の狙いと組み立てについて確認しよう。

古代ギリシアの都市国家では、市民は歩兵として戦場に赴き、最前線で命を賭けることは当然のこととされており、どのようにポリスを運営するのかという政治術は、他の都市国家や夷狄との争いにいかにして勝利を収めるのかという軍事的なものと不可分の関係にあった。ポリスは好戦的な存在であった。⁽⁷⁾これを反映して、思想の上でも、守護者といえは軍事力を行使するものと想定され、プラトンの哲人王においても、育成過程で軍務につくことは当然に経験すべきキャリアとされている。政治と軍事の関係は、共和政ローマにおいても一貫している。古代において帝国を築くまでに拡大したローマという都市国家は、そもそもは周囲の都市国家との抗争に生き残るための軍事的な共同体であったし、元老院の議員たちは、戦闘では比較的安全な位置にいた騎兵であったとしても、いずれも戦場での経験の持ち主であっただろうし、共和政のなかでの王制の要素であるコンスルの主要な任務は戦場においてローマ軍の指揮をとることであった。ポリスも共和政ローマも包括的な政治共同体であり、全体性、一体性、閉鎖性のもとに、いわば

総力戦体制が敷かれていた。従って、現代の政治理論が、ギリシア、ローマの制度的枠組みを援用したり、ギリシア・ポリスに、政治の理想を無批判に見るならば、総力戦を是認する言説、価値意識を飲み込むことになる。

包括的で閉鎖的な政治共同体は中世ヨーロッパでは成立せず、政治と軍事とのかつての關係は変化する。中世ヨーロッパでは、一つには聖なるものが人々に大きな脅威を持ち、これを背景として世俗君主だけでなく、教会が權威を保っていたこと、そして世俗君主は、生産力の低さや技術水準の低さのために十分な軍事力を保持していなかったこと、これらのために、世俗君主は暴力的な支配を一元的に權威づけることはできていなかった。また人々が集い、空間を共有したのは教会堂であり、安全を感じることができたのは、城壁で囲まれた都市であった。そのためフィッギスが述べているように、教会こそが国家であったという捉え方さえも可能なほどであったし、また都市にこそ公的空間が存在したともいえた。⁽⁸⁾ 政治的なものが權威や共通性と深く関わるならば、軍事力の担い手である王の支配が、權威や共通空間を独占できていないとき、政治的なものは軍事力に包摂されることはなく、総力戦的なものは存在しない。あるいは、祈る人、戦う人、働く人という言葉に端的に表現されているように、中世ヨーロッパでは、機能的な一部の騎士に限定され、そのため政治は、軍事と関わりを持ったとしても、その関わりは限定的であった。さらにそのような騎士による貴族的な戦争は、カイヨワの言葉を借りれば、仮に流血に至ったとしても遊戯やスポーツに近いものである。⁽⁹⁾

中世的状況は、十二世紀頃からのイタリアにおける都市国家の発展によって変化の兆しを見せ始める。ヴェニス、ミラノ、フィレンツェ、シエナ等々に代表される中世末のイタリアの都市国家は、通商上の優位を確立したり、周囲の地域に対する支配を安定化させるための軍事的な共同体としての性格を持ち、その構成員を防御の戦いに動員する可能性を持っていたからである。⁽¹⁰⁾ そして軍事革命と評される十五世紀頃の兵器の変化、発展を通じて、より性能に優

れた兵器を手にする側が勝利を得るようになって、この変化は更に大きく定着した^①。優れた兵器を、より多く手に入るためには資金が必要であつたが、これを実現できたのは、徴税機能を増すことで収入を増大できた主権国家であつた。格段と増大した国家の歳入は、国民の社会保障などに充てられたのではなく、その殆どは軍事費に注ぎ込まれ、そうした過程を通じて、官僚組織、常備軍として表現される暴力装置としての国家は支配力、支配領域を拡大したのである^②。結果として、国家は正当な暴力の行使という近代国家の特徴を一層帯びるようになり、政治は、再び古代のように、軍事的なものと深く関係を結ぶようになる。但し、そうした軍事的なものは、近代初頭では王の独占物であり、依然として殆どの国民には無縁なものであつた。国王の兵は傭兵を主力とし、一般国民に軍事的な力を与えることは、民衆がその力を用いて国王の支配を覆すことが危惧されたために、控えられた。また教会が民衆に宗教教育を施すことで一定の権威を維持することも、従順に服従する民衆を作るといふ観点から歓迎された。つまり、国家が暴力を独占しつつ、国民を戦場に動員する総力戦体制は、この段階では成立していない。

こうした状況に著しい変化をもたらしたのは、ナポレオン戦争にはじまる戦争の形態の変化であつた。鉄道の発達、電信技術の発明、携行食糧の開発、兵器の殺傷能力の著しい増大などにより、十九世紀を通じて戦争は消耗の戦いから相手を殲滅させる戦いに移行し、どれだけ大量の兵員を動員できるかで決着するようになった。戦争は、国王とその比較的少数の傭兵の独占物ではなく、全ての国民が関与すべきものになり、この過程で主権国家は国民国家へと転換したのである。国民国家は、規模という大きな違いはあるとしても、市民を兵員として動員し、被治者を政治的構成員とするという点で、古代の都市国家と類似している。そのため、十九世紀以降、古代の政治的諸観念を引証しながら、今日まで続く、国家、政治、公共性などの捉え方が確立することになった。かつてダイシーは、十九世紀末の状況を collectivism として批判したが、それは国民国家が古代の都市国家のように凝集力を強め、総力戦体制へと移

行しつつある世情を的確に捉えた言葉であった。

こうして古代の都市国家、そして近代の主権国家は、総力戦体制を遂行する軍事的な暴力装置であるという共通点を持つことになり、国家の形態と深く関わる政治的な諸観念も色濃く軍事的な刻印を帯びることになる。例えば、共和政、民主政、貴族政、寡頭政などの観念は、古代においては誰がポリスの守護者であるのかという、軍事的なものを軸に設定されていたし、中世イタリア都市国家に起源を求められるシヴィックヒューマニズムの伝統も、それと結びつく共和主義の伝統も、軍事思想の側面を強く備えていた。⁽¹³⁾ 審議的民主主義などの議論では、共和政的な伝統と、審議的民主主義が重なり合うなどの見解がしばしば提示されているが、仮に共和政、共和主義について、軍事的な要素を捨象して扱うならば、そこで扱われる共和政は、実際に過去に存在した多くの共和政とは異なる仮想のアイデアを示していることになる。⁽¹⁴⁾

やや行論から逸れるが、共和主義について少し触れておこう。共和主義の内容を歴史的に探る場合には、その時代の共和主義が、何と対置されていたかが重要な手がりとなる。中世以降のヨーロッパでは、共和政と対称的存在とされ、共和政と分節されたのは王政であった。その場合共和政は、王が存在しない政体と認識され、無条件に民主政とイコールの関係に立つものではなかった。王政では一人に権限が集中し、ともすれば人々は暴政の驚異に晒されることになる。その点で、P・ペティットのように、共和政を独立という自由を保持するための体制と定義する余地がでてくる。⁽¹⁵⁾ そしてこの意味での共和政には、政治参加を通じた市民的徳の涵養といった側面は不可欠の要素とはならない。しかし、十九世紀が進むにつれ王政が次第に退き、多くの政治体制が共和政に近いものとなろうとするとき、すでに力を失った王政に対して共和政を掲げ対置させることは現実的な意味をなさず、共和政は、防衛的な自由主義と対置され、参加民主制と等しいものとイメージされることになる。この場合には、共和政の典型的な像は、古代ギ

リシアポリスの民主政に求められ、市民参加はミリシアの伝統とそのまま重なり、また市民的な徳は勇氣を重要な構成要素とするようになり、軍事的なものを抑制する論理が脆弱になる。⁽¹⁶⁾ 仮に政治と暴力はカテゴリーカルに異なるのだと論じても、この共和政モデルでは、古代以来の好戦的な共和政の性格が確かに継承されてしまうだろう。⁽¹⁷⁾

また政治の脱主権的なあり方を模索し、国家と市場とは別の領域の市民社会に政治的なものの発現を見いだそうとする議論では、人々に共通するもの、共通する公的空間、などの表現が好んで用いられがちであるが、共通するものは、その外部に存在するものが構成員に明確になるときにはつきりと感受されること、つまりは共通のものがより具体的に現れるのは、争いの場であるということは、看過されがちだと言つてよい。⁽¹⁸⁾ 共和政と親密に関わる公共性は、抽象的な概念としては、様々な文脈に用いることができるとしても、その具体的な姿を確定することは難しく、その姿が誰の目にも明確になるのは戦時や対立においてであるということをおぼろしく忘れることはできない。

但し、政治的なものと物理的暴力、軍事との深い関連性は、政治が舞台としてきた古代や近代の国家という存在が、そもそも軍事的な性格を強く帯びていたことに由来している。先に触れたように、古代において都市国家は、外敵からの防御や周囲の征服のための共同体であり、近代の主権国家は戦争によって育まれてきた。⁽¹⁹⁾ そして十九世紀後半以来の総力戦体制のもとで暮らしてきた私たちは、総力戦体制に付随する国家観、政治像、公共性の捉え方を自然なものだと思ふようになってきている。だが、近年のグローバル化と戦争の形態変化により、そうした総力戦体制は、様々な面で綻びつつあり、国家の退場とも形容される事態が進行しつつある。国家の性格が変化するならば、政治的なものと暴力的なものとの関わりも変化し、政治の脱主権化ということも現実味を帯びてくるだろう。

こうしたパースペクティブに依りながら、本稿は、現代の政治観、公共性観念が、十九世紀後半からの総力戦体制にいかん規定されているか、またそこでは政治的なものと軍事的なものとのいかに緊密なものとされているかを明ら

かにし、政治についての新たな観念の結び方を模索する。その作業に際しては、まず政治と軍事的なものとの歴史的なつながりについて、ギリシア、ローマの時代から近代主権国家の生成展開までを確認する。（第一章）更に十九世紀末の総力戦体制の成立について、例えば国民文化、教育の点から考察し、総力戦体制が、現代に至る政治的観念を規定してきたことを明らかにする。（第二章）引き続き、グローバル化が進展する現代にあって、それがどのように変化しているのか、その変化の中であって、どのような観念を抱きうるのかを示す。（第三章）

第一章 政治と暴力の歴史的関連

第一節 政治的なもの、聖なるもの

古代からの政治と物理的暴力との関係を辿るに際して、まず政治的なものと聖なるものについての見取り図を簡潔に示しておく。聖なるものと政治的なものを並列して扱うのは、特に古代において両者が緊密な関係を有していたからであり、また近代に至っても、聖なるものが無意識に政治的なもののあり方を規定している側面があると思われるからである。

政治的なものというときまず想起されるのが、K・シュミットの『政治的なものの概念』だろう。シュミットは、現実の諸条件を踏まえつつ、仮設的、演繹的に、政治的なものを示し、道徳的なものは善と悪、美的なものとは美と醜、経済的なものは利と害であるのに対して、政治的なものの基礎的なカテゴリーは、友と敵であると喝破した。但し、シュ

ミットの理解に従えば、敵には公的な敵しか存在せず、政治的単位は主権を持つ単位であるということになる。シュミットの論理は、二十世紀前半の国民国家体制が一層堅固で不動のものとなった時代状況に大きく規定されている⁽²¹⁾。シュミットの捉え方に素直に従うと、グローバル化の進展の中で国家の退場といった事態が現実化したり、国民国家体制が大きく変貌したならば、政治が存在しなくなったり、政治的なものについて語ることができなくなる可能性すらある。もちろん、C・ムフのように、シュミットの構図を継承しながらも、脱主権的な形で政治を構想することも不可能ではない。しかし、その場合でも、そこには市場の経済関係に対する極めて消極的な評価といった側面は継承されるままになるだろう。

シュミットに並んで想起される政治の定義といえば、D・イーストンによる「諸価値の権威的配分 *authoritative allocation of values*」だろう。この定義は、議会、行政府などの政治的諸制度を一つのシステムとして捉えようとするイーストンのシステム論に基づいている。イーストンは、社会学の領域で盛んに議論されるようになったシステム論を取り入れ、政治システムを社会システムのサブシステムとして捉えた。但し、この定義では、議会、行政府など、これまで政治的領域に属すと一般に捉えられてきた諸制度がそのまま政治システムにあてられている。二十世紀半ば、国民国家体制が厳然としていた場合には、説得的であっても、今日のように状況が流動化している時、その変化に耐える枠組みであるかは疑問といつてよい。サブシステムとして実際の政治的諸制度をあらかじめグループ化してしまうのではなく、少なくとも、社会全体のシステムの中に、再度、政治的なものを位置づける必要があるだろう。

では、社会システム全体の中で政治にはどのような位置が与えられるのだろうか。パーソンズは、AGILモデルを提示し、Gによって表示される目標設定のサブシステムに政治の役割を与えている。但し、AGILモデルは、現実の諸制度から帰納的に設定されたものではない。従って、目標設定機能が、現実の議会、行政府などの政治組織の機能

と一致する必然性はない。実際の政治諸組織が、統合や適応などの機能を果たすということもありえる。⁽²²⁾

パーソンのシステム論を更に発展させたシステム論としてはルーマンのシステム論がしばしば取り上げられる。ルーマンによれば、客観的に成立するのは個々人の行為のシステムではなく、コミュニケーションのシステムである。そして、時代を経るにつれてそのシステムは多様化、複雑化し、現代では、権力をコードとする政治システム、法不法をコードとする法システム、貨幣をコードとする経済システム、美をコードとする芸術システム等々、様々なシステムが存在している。芸術のシステムであれば美を求めるのが望ましく、経済システムであれば多くの利財を求めるのが望ましく、法システムであれば適法であることが望ましい。また冒頭で取り上げた司馬による徳川家云々というデイスコースは権力をコードとする政治システムを構成し、トゥキユデイスの語りも同様となる。但し、ここでも、では権力 Macht とは何か、ということが問題になる。人々の実際のコミュニケーション、デイスコースに具体的に存在している言葉に着目するのか、それとも、そうしたデイスコースのメタ次元に存在しているものに着目して権力を定義するのかによって、議論の様相は随分と異なってくる。問主観的に成立するコミュニケーションシステムという本旨からは、前者が考えられるが、その場合には、A・ギデンズがいうような具殻制度的なものを十分に捉えることができるかどうか疑問が残る。⁽²³⁾ グローバル化が進展し、近代国家の意義が揺るぎ始めている現代では、近代国家を前提とした権力概念に固執することは適切ではあるまい。

こうしてみるとシステム論では、仮説的、演繹的に投企されるシステムの中に政治が配置されている。現実の諸条件を考慮しつつ、仮説的、演繹的に提示されるという点では、システム論の組立とシュミットの立論は共通する。そこで本稿でも、現在のグローバル化が進展し、主権国家体制が揺らいでいる状況を考慮しつつ、政治的なものについて仮説的な枠組みを提示しておこう。

現代での政治一般を巡る焦眉の問題は、経済的なものと政治的なものとの関係をどのような原理に基づかせ、またどのように調整するのかに関わっている。一方では、政治的な判断を数量化すべく、経済的なものに政治的なものを全て従属させてしまう方向がある。他方では、政治的なものと経済的なものとを際立たせるために、経済に市場を、政治に市民社会をそれぞれアリーナとして与えるなどがある。前者は、政治的判断の材料を提供してくれるという点では手段的価値はあつても、最終的な判断基準を与えてくれるようには思えず、後者は、市民社会を独自の自立したアリーナと設定することの現実性に疑問が残る。そこで本稿では、経済的なシステムと政治はどのような関係性を持ち得るかという視座から、モデルを立ててみる。

経済的なシステムは、広い意味では、競争的な協働、あるいは分業的な協働によつて特徴づけられる。一般に消費者は、生産者に生産物についての直接のコミュニケーションを行うわけではないが、よい生産物に対しては高い需要で答え、その需要を見て生産者は、生産に工夫をする。あるいは同じ製品の生産者は競争関係にあるが、その競争の結果、コストダウンや製品の改良が進み、社会全体は恩恵を受ける。広い意味で捉えれば、経済的なシステムは、協働的な分業であれば、貨幣を直接の媒介手段としなくてもよい。これらの関係は、D・ヒュームの言葉を借りていえば、黙約 (convention) といえる。これは、スミスの描く商業社会と同様に、相互に直接の意思疎通や契約関係を必要条件とせず、実際の行動の経過の中から自生的に生じる協働システムである。ただし、黙約は、常に安定的に成立し、また多くの構成員の福利に寄与するとは限らない。経済状況の変化や技術の発展などの諸変化により、人々の不満が募り、黙約が流動化し、システムが機能不全に陥るということが起こりうる。そうした時にその矯正を果たすべく必要とされるのが、政治的なものであると置こう。つまり、人、あるいは集団の間に、黙約に基づく円滑な日常が成り立たなくなつたとき、当事者のどちらか、あるいは一方は、それまでの考え方、感じ方、行動などを修正するこ

とを余儀なくされるが、それを実現するプロセスを政治的なプロセスと仮設する。政治的な営為とは、組織や人の間に存在する、協働不全を意図的に解消するために、組織や人を、その意に反した行動をとらせる作業となる。アリストテレスの用語を用いれば、矯正的正義が政治についての一般的なモデルとなる²³。

このように捉える場合、政治は、古代の都市国家や近代の主権国家に固有なものではなく、また主権に由来する公的領域に限定されるものでもなくなる²⁴。また、政治的な手段には、劣位にあると想定するものが、圧倒的な力関係を意識して、黙従、追隨するなど、表面に現れる相互行為が存在しないものから、物理的暴力を用いて従来との修正を図る場合など、多様な様態が考えられる。政治的手段について簡潔に見取り図を示せば、上図のようになる。

主体が対等と想定	
討議・説得	戦争(内乱、暴行)
非暴力	暴力
馴致・教化・模倣	隷従(威嚇、抑圧)
非対称的力関係だと想定しそれを利用	

引き続き聖なるものについて確認しよう。人は何か見慣れず、奇妙なものや状況に遭遇して恐怖感を覚える。そうした時、その恐怖感を覚える対象に名前を与え、日常の親密な世界の一部とすることができたとき、その恐怖感は和らぐ。バーガーによれば、「社会的に確立されたノモスは、おそらくそのもつとも重要な局面において、恐怖を防ぐ楯と理解できる」のだ²⁵。ルドルフ・オットーは『聖なるもの』の中で、言葉で分節化されておらず、人間に脅威の念や圧倒性、躍動性の印象を与えるものをヌミノーズと呼んでいる²⁶。そしてエリアーデは、人類学的に、そうしたヌミノーズ的なもののあり方、そしてコスモスとカオスの存在構造を解き明かした²⁷。人間が意味を与えたコスモスが日常の親密な世界であれば、このヌミノーズは、コスモスの外にあるカオスでもある。近代に至り、自然科学の発達などにより、日常的な親密な世界がより隙間なく編

み上げられ、ウェーバーの言葉を借りれば、脱魔術化の傾向は一層完全なものとなっているように見受けられる。しかし、自然科学的骨格により支えられるコスモスは、完全に閉じた体系としては依然として確立しておらず、現代に生きるわれわれも、日常生活の中で、時に予告無く、ヌミノーゼ的なものに遭遇することになる。それは W・ジェイムズにならば、実在が現前してくるという未分化な感覚でもある。⁽²⁹⁾ こうした事情は、日本の文化状況の中でも成立してきた。大野晋は日本の神の個性を解き明かすべく、「カミ」の特徴を、漂動、彷徨し、場所を領有支配し、超人的で恐ろしい威力を持つものと説明しているが、これは、ヌミノーゼ的なものの説明にほぼ一致するといつて良い。⁽³⁰⁾

こうした聖なるものは、ギリシア悲劇に象徴的に表現されているように、暴力、破壊と隣り合わせの存在でもあった。カイヨワが論じるように、戦争において、聖なるものは、より端的に立ち現れる傾向にあったのである。⁽³¹⁾ 古代世界において、聖なるもの、暴力的なものに共通していたのは、それらが人々に引き起こす恐怖心であった。そしてその恐怖心は、人々が協働社会を維持してゆく障害となる。そうした恐怖心を意識的にコントロールする術として、政治が生まれる。その点では、「政」を「まつりごと」といまだに呼んでいる日本の文化的伝統は、必ずしも特殊なものではない。

そこで、このヌミノーゼ的なもの、そして聖なるものが認識論の組立の中で、どのように扱われてきたのかを簡単に辿ってみよう。ヌミノーゼは、感覚から得られる情報に基づいて言葉によって把握できるものではなく、日常世界から超越的に存在する。そうした感覚世界と、それから超越した世界という二元的な世界観については、例えばプラトンのイデア学説に典型的に示されているように、古代から意識されてきた。そして、勇敢な行為の動機は恐怖であつてはならず、美の追求でなければならないというアリストテレスの指摘にあらわれているように、ヌミノーゼ的なもの

のは、暴力的な破壊、美しさと通底する構造を持つものと考えられてきた。

この二元論的な枠組み、そして一方に聖なるものとの繋がりを見いだそうとする姿勢は、自然科学が発達し始めた近代に至っても持続し、感覚器官から与えられる情報のみに基づいて認識論を構成しようとしたイギリスの経験論においても踏襲されている。ロックは、単純観念が集合して複雑観念になり、それに基づいて日常に認識される世界が形成されると論じているが、そこで想定され、一次性質のみから構成されている外界は、我々が日常想定している外界とは全く異質な存在となる。ロックが想定する、微細な粒子から構成されるようなデモクリトスの新外界は、ヌミノゼ的な性質を帯びていた。そしてそうした外界についてのイメージは、バークレイ、ヒュームと続くイギリスの経験論哲学の系譜において、確実に継承されたといつてよい。だからこそ、例えばバークレイは、その外界を直接に神に結びつけ、その実体としての實在性を否定することができたのである。

ヒュームの場合、神の存在を無前提に認めることができないという立場が堅持され、結果として、この外界は、実在するかどうか、それがどのような性質を帯びているのかも断定することができない存在となる。確実なのは、感覚器官に刺激があったということだけであり、それが外界からのものであるのかは不可知となる。そして自然の成り立ちや社会的現象の考察に際して、外界は、考慮する必要はなく、また考慮すべきではないものとなり、道徳の成立についても、社会制度の成立についても、いずれも人間の意識に生じている感情から解き明かせばよく、外界は視野の外に置かれる。但し、なぜ感覚器官にそうした刺激があるのか、ヒュームは、敢えて問わない姿勢を選び取ったが、その問題は、アポリアとして残り、その認識論を学び、継承する者達の様々な想像を刺激した。例えば、基本的にヒュームの認識論を継承したバークは、その外界のヌミノゼ的な性質を鋭く嗅ぎつけ、その世界と驚異、恐怖の念とを結びつけつつ、そこに美の存在契機を見だし、『美と崇高の起源』を著した。一方、カントは、やはりヒュームにより

独断のまどろみから覚醒されたが、その外界を物自体の世界と置き、道德法則の支配する世界として合理化し、ヌミノーゼ的な性格を一掃しようとはかった。

一般に古典的自由主義は、外界、聖なる世界と共同体の全体的な融合を断念するということに成立するといつてよい。あるいは、聖なるものとの関わりを認めるとしても、個人的な経験の範囲内でのみ認めるといふ姿勢をとる。ルーマンの意識のシステムと社会システムという構図に引き据えていえば、意識のシステムにのみその関わりを認めるということもできる。それに対して例えば、ルソーは、聖なるものを共同体の自然宗教という形で共通の経験としようとする。あるいはカントは、物自体の世界という形で合理化された聖なる世界を、政治的判断の原理に関わらせようとする。つまり社会システム全体に聖なるものとの関わりを設定しようとした。ルソー、カントを経過した後の市民社会批判の系譜は、例えばヘーゲルに典型的に見られるように、聖なる世界を共同体の構成員の共通の経験としようとする傾向を強く持つことになり、そうした構えは、総力戦体制を支える重要な柱となる。

第二節 古代社会における政治的なもの、軍事的なもの

ギリシア、ローマでは、政治的なものは対等な主体間に成立するものと想定されており、主人と奴隷、支配的な国家と隷属した国家との間には政治的なものは成り立たないと認識されていた。それに対して、政治的な手段についての本稿の見取り図に基づけば、適切な協働関係が築けていない場合は、古代の家族の中の主人と奴隷の間においても、政治的な手段が介在する可能性がある。例えば奴隷の態度や働きを変えるために、口頭で指示する、鞭で打つ等々の行為は政治的な手段となる。奴隷の側でも、主人の姿勢を変えさせようと何らかの企てを行おうすることもまた政

治的な対応になる。

たしかに、対等な市民、対等な国家同士に成り立つ政治的な関係のうち、国内的には暴力は慎まれ、言論が主要な手段となり、そこから冒頭に示したように、政治は物理的暴力を伴わない討議、説得であるとする捉え方が生まれる。おそらくそれは、対外的な戦争を遂行するためには、共同体が暴力を排除して団結する必要があったことにも起因している。しかし、実際には、国内の政治は、常に討論と説得によっていたわけではなかった。ヘロドトスの『歴史』には以下のような記述がある。

「しかしアテナイ人たちはたちまちに激昂し、評議会に列席していたものたちはもちろん、会議場の外にいたものもその話を聞くとリュキデスのまわりを取りかこみ、石を投げつけて打ち殺してしまった。……（中略）……事の次第を聞き知ったアテナイ人の妻たちは、命ぜられもせぬのに互いに誘い合わせてリュキデスの邸に押しかけ、その場でその妻も子どもも石を投げて打ち殺してしまった。」（第9巻・5）

またローマにおいても、対外的な戦争が一段落したグラックス兄弟の改革期には、内政についても暴力が重要な要素となっていく。例えばアッピアヌスの『内戦』を繙くと、その冒頭でグラックス兄弟やその支持者が撲殺、絞殺される記述に遭遇し、共和政ローマの政治が、言論によってのみ決したという評価が必ずしも事実と一致していないことがわかる。そして内政における暴力の存在感の増大を経て、カエサル時代の内戦がもたらされた。

この時代、国家間の交渉の多くは戦争によって決せられた。ポリス自体、共通の防衛の必要性のためにまず生じたものであり、戦争は、コスモスとしての共同体の構成員がそのコスモスを守るために不可欠の行為であった。¹² 戦争で

の役割がそのまま政治の場での発言権に反映したという伝統的な解釈には疑義が唱えられることがあるとしても、社会の構成員の殆どが戦闘に関係していたということに異議が挟まれているわけではない。⁽³³⁾ 戦争でどのような役割が与えられたとしても、多かれ少なかれ、全ての者達が戦争では死と隣り合わせにある。陸上での戦いの最前線にあった歩兵たちが、戦場にあつてどのように感じたのかに十分に同感することは難しいが、彼らがどのような戦闘を経験したのかを知ろうとすることは、意義深い。古代にあつて、戦争が日常の一こまを形成していたならば、戦場での経験もまた平時の彼らの考え、行動に少なからず影響を及ぼし、言論の場での発言は、そうした戦場での経験を前提としていたと考えられるからである。

古代の陸上での戦いの中心は、重装歩兵であつた。重装歩兵が採用したとされる密集方阵は、左手には楯、右手には剣あるいは槍を携行し、甲などをまとった歩兵が、数列に重なつて集団的な戦闘を行うという戦術である。そして、一列は八人、その列は縦には少ない場合で四列、多い場合は八列以上であつたと伝えられている。そして第一列の重装歩兵は槍で的を探し、その間ずっと、隣の歩兵の円形の盾で守られる脆い右側を守ろうとする。落ちた装備の残骸や傷ついたり死んだりした者達を足下で乗り越えようとし、押されながらバランスをとろうとする。⁽³⁴⁾ 後列の歩兵は、体重をかけて前の歩兵たちに後ろからの力を加え、また右手の長い槍で相手を突く。そして方阵は、死んだもの、傷つて倒れたものを踏みつけ乗り越えて前進しようとしなければならない。この密集方阵での戦闘は、現代でいえばラグビーのスクラムのようなものであつたと形容されている。⁽³⁵⁾

重装歩兵の密集方阵については、冒險的な生涯を送ったクセノフォンの著作に記述が見られる。⁽³⁶⁾ また『イリアス』に描かれるのは、英雄時代の戦いであり、そこには集団での戦闘は描かれていないが、叙事詩として語り伝えられたということは、戦場に赴く者達が、どのようなイメージを抱きつつ臨んだかについて、想像の手がかりを与えてくれる。

戦場の雑踏、叫び、矢の飛び交う音、射られ斬られた者達のうめき、そうした音、情景が『イリアス』には充滿している。

「撃たれた男は、さながら庭先の罌粟が、実も重く、春雨にも濡れて片方に頭を垂れる如く、兜の重みにがくりと頭を片方に傾けた」（第八歌 300-308）

「トロスが歎願しようと、アキレウスの膝に手をかけると、相手は太刀で肝のあたりに斬りつける。肝は体の外にこぼれ出て、そこから流れ出す赤黒い血が上衣の懷を満たし、息絶えんとする彼の両目を闇が蔽った。ついでムリオスに近づき槍で耳の辺りを突けば、青銅の穂先はそのままずぶりと刺さってもう一つの耳からぬつと出る。次ぎに柄のある太刀でアゲノルの子、エケクロスの頭の真ん中に斬りつければ、刃は一面血にまみれて生温かく、エケクロスの両目をどす黒い死と苛酷な運命がびたりと閉じた。」（第二十歌、455-489）

もちろん、古代ギリシアの殆どの人々が、好戦的な血の気のあまりに多い人々であつたと断定することは公平さを欠いている。例えば、アリストパネスの幾つかの喜劇の中には、好戦派に対しての風刺が散りばめられ、また戦争について「戦争の様子ときたら、俺たちが逃れようとしているのはこいつなのか、恐ろしい、無慈悲な」とその恐ろしさを強調していた⁽⁹⁾。しかし、その劇の終盤では、子どもたちが戦争についての叙事詩を、「両の軍勢は進み寄つて、間近に迫れるそのときに、革楯、打ち出しつけたる円楯は、はつしとばかり打ち合いぬ」とうたう場面が出てくるが、子どもの頃から叙事詩などを通じて戦争が日常化されていたことは確かにうかがえる。

おそらくここで肝要なのは、市民たちは、いつ何時でも、戦場に赴き、共同体のために死を覚悟で戦わねばならなかったということである。『パイドン』でのソクラテスは、刑死に臨み、魂の世界について明るく輝かしいものと語つ

ているが、戦場での死について語るプラトンは、それによって魂が肉体から逃れ、イデアの世界に親しむことができるようになるのだとは語っていない。そして、美德については、戦場で共同体の存亡を賭けて勇敢に戦う資質を涵養することを軸に論じられることになる。政治に参加して公共道徳を磨くという論理は、古典古代や近代の西欧では随所に示されてきたといつてよいが、その際の徳とは、主として、アウグステイヌスが掲げるような内面的なものではなく、勇氣を中心として外に對して發揮されるものであった。また、既に触れたように、公共道徳の公共的なものは、他国との戦争を通じて最も具体的で、明確に、構成員の間に顕現する。ギリシア、ローマの伝統の中で徳の内面化を試みた人物としてはセネカが挙げられるが、セネカが生きたのは共和政が帝政に移行し、市民兵が共和国を支える時代ではなかったということは示唆的である。

これらの点については、プラトン、アリストテレスなどの著作からも確認することができる。確かにプラトンは戦争を賛美しているわけではなく、むしろ戦争は肉体的なものに固執することから生じるのであり、知を愛するということは正反對のものであるという立場をとっている。『国家』においても、「国々にとって公私いづれの面でも害悪が生じるとき最大の原因であるところのもの、そのものから戦争は発生するのだ」(国家、373-E)と論じているし、『パイドン』では、「戦争にしても内乱にしてもいろいろの争闘にしても、それらはほかならぬ肉体と、その持つ欲が生ぜしめている…(中略)…戦争はすべて財貨の獲得のためにおこるのだが、その財貨を手に入れよと強いるのは肉体であり、われわれはその肉体の氣づかいにまったく奴隷のように終始している。」(パイドン、60C)

しかし、それにもかかわらず、『国家』では、ポリスが他のポリス、あるいは異民族と戦うということが日常なこととされ、臆病でないこと、勇氣を持つことが美德として度々語られている。また、プラトンの立論において、ポリスは一つの全体であり、個々の人間はその部分に過ぎないという姿勢は一貫している。そのように共同体が閉じて

いるということは、他の都市国家との戦争に移行することを容易にするだろう。更にプラトンは、勇気ある人間について、「誰であれ、心の中に死の恐怖を抱いているものがそもそも勇気ある人間になれると思うかね」（国家、386）、「生きながら敵の手に捕らえられた者は、捕らえた敵たちに贈物として与え、獲物として好きなように処置してもらおうべきではないか」、「拔群の武功によって名をはせた者は、まず陣中において、いっしょに出征している若者たちや少年たちのひとりひとりから、順番に冠で飾らなければならないと思わないかね」（国家、468）と述べ、敗れることの恥辱、武勲を挙げることの誉れをうたっていた。

ポリスと戦争の関係については、アリストテレスも類似した立場をとっている。アリストテレスは『政治学』において、「国は財産を平均化することによって男の数を増やした方が優っている」と論じ、ポリスの優劣が最終的に軍事力によって決定されるという前提に立つ。（政治学、1270-30） また気概があることと、その共同体が自由であることとの間には関係があるとして、「アジアの民族はその靈魂が思慮的でまた技術的ではあるが、気概がない、それゆえ絶えず支配され、隷属している」（政治学、1327-206）とし、さらに「支配の力も自由の愛もこの能力にもとづいている」（政治学、1328-a）と結論づけている。

もちろん、アリストテレスは、生活を戦争と平和に分け、戦争は平和のために行わねばならないとし、「国民は事業と戦争を行うことができないが、しかし一層多く平和と閑暇とに生きることができなくてはならない」としている。（政治学、1233-a40） しかし、人や国家の最終的な目的が平和的な閑暇を享受することにあることを力説するとしても、戦争という行為が手段的価値としても排除されるわけではなく、むしろ戦争が日常的であることが前提となっている。そして、隷従しないため、奴隷にならないためには武力を積極的に行使できねばならない、という考え方は、道徳論にも一貫する。『大道德学』でも『エウデモス倫理学』でも諸徳の検討に際しては、勇気が

まず第一に取り上げられ、『ニコマコス倫理学』においても諸徳の中で勇氣が最初に論じられている。そして、市民的な勇氣が本当の勇氣に似ているとして、アリストテレスは、次のように述べている。⁽³⁸⁾

「職業的な兵士たちは危険が度を越えたり、味方の数や装備が劣っていたりすれば臆病なものになる。すなわち、真つ先に逃走するのはかれらであり、踏みとどまって死んでゆくのは市民たちなのである。」「市民たちにとつては逃亡は醜いことであり、そのようにして救われるよりは死ぬ方が望ましいことであつた。」(ニコマコス倫理学、1116-b20)

ギリシアと同じ都市国家から発展したローマでも、戦争と政治、公共道徳についての関連は異なることはない。むしろギリシアのポリスよりも戦争を通じて帝国を形成するに至るローマの場合、その関係はより一層鮮明であるといつてよいだろう。共和政ローマの時代の軍制は財産の多寡を基準として整えられていた。最も大きな財を手にした者達は騎兵となり、次いで重装備の歩兵となった。騎兵たちは、多くの戦いにおいて、最前線からはやや離れた比較的安全な位置にいたということはあるとしても、元老院を構成する議員たちもみな戦場での経験があるということになる。⁽³⁹⁾

ローマの共和政では、政治はあくまで言論によるものとされていたという伝統がしばしば称揚されてきた。しかし、ローマの場合、アテナイのように民会で全ての政策が決定されることはなかったこともあり、レトリックの伝統が、共和政の成立とともに形成されたということではなかった。⁽³⁹⁾ また「ローマの政治、レトリックについての現代の知識は、キケロの言論、理論、手紙によって形成されてきた」と論じられるように、レトリック、雄弁というとキケロが想起

されるが、キケロが活躍したのは、共和政がかつての姿を失い、帝政が目前に迫っていた時代であった。⁽⁴⁰⁾

ゴールズワージーは、市民兵制度によるローマ軍が他の軍隊よりも強力であった理由として、その兵員の膨大な数と、ローマ市民と同盟市市民がすんで訓練や命令体系に従ったことを挙げている。⁽⁴¹⁾ また、ローマが好戦的であった理由として、社会的な均衡を保つためには戦争が不可欠であったことが挙げられる。ローマ社会は、戦争によって新しい土地と新しい人的力を得ることで、豊かな統治階級に一層の力を与え、また貧民には植民の可能性を与えることで社会不安の原因を緩和したのであった。従って、共和政ローマは、「社会が戦争から遠ざかっていると、内側から力を失い衰退し、死滅してしまいかねなかった」のであり、全く戦争がなく一年が過ぎてしまわないように、コンスルは小規模な出兵を敢えて行う社会であった。⁽⁴²⁾ さらにゴールズワージーはまたローマの戦争についての非妥協的な態度について、「ローマ人にとって戦争は生死を巡る闘争であり、生か死のいずれかの形でしか終わり得ないものであった」と述べ、ローマでは戦争と政治とは不可分に結びついてたと論じている。⁽⁴³⁾ そしてその理由として、少数の貴族が望んだのは、コンスルの地位を得ること、その地位についている間に偉業を達成すること、そしてその後元老院において、その偉業に相応しい地位を得ることなどであり、それは戦争での勝利以外からは得ることができないものであったということが挙げられている。⁽⁴⁴⁾ 貴族にとつては、コンスルとして凱旋式を行うことが生涯の荣誉であり、そのためには戦争が行われることが絶対的な前提となる。荣誉、名誉は、戦争での勝利以外とは結びついていなかった。そうしたメンタリティを雄弁に物語るものの一つとして、コンスルであったデキウス父子の自己犠牲（デイヴォテイオ）を忘れることはできない。リヴィウスは、戦況が不利とみるや、デイヴォテイオを行い、自らの命と引き替えに勝利をもたらしたコンスル、デキウスについて次のように輝かしく描写している。

「この祈りを唱えた後、彼は、リクターに命じて同僚のティティウス・マンリウスのところに行かせ、自分が軍隊のために自己犠牲したと遅滞なく伝えさせた。そうして彼はトーガを両手が自由になるように巻き、完全武装して騎乗し、敵陣の真ん中に躍り込んだ。これは両陣営から賞賛されるべき光景であり、神々の全ての怒りを償い、自国の民からラテン人に災厄を反転させるべく天上より送られたかのように、その高貴さは、人間を越えたものであった。こうしてデキウスが携えたあらゆる形態の恐怖とパニックは、軍旗の列を混乱に陥れ、ラテン軍全体に深く及んだ。はつきりとこれは見て取ることができた。というのも、彼が騎乗してゆくところ、人々は、死を購う星に撃たれかのように震え上がったからである。」⁽⁴⁶⁾

そしてそれより半世紀近く経過すると、父と同様にダイヴォティオを行うことになった子デキウスについてもリヴィウスは以下のように触れている。

「彼は力なく、敗走をとどめることができないとわかった。その時、彼は父の名であるプブリウス・デキウスの名を呼んだ。『どうしてもはや、わが一族の定めを遅らせよう。わが一族は、国のため危険を避けるべく自己犠牲をはたす特権を与えられているのだ。大地と地下の神々への生け贄として我が身を敵の軍に差し出すときだ。』」⁽⁴⁷⁾

この挿話に接し、現代に生きる私たちは、コンスルが軍事的な司令官であり、危機の時にあつてはすすんで命を捧げたことを再確認させられる。政治に携わっているものたち、あるいは元老院で議論を交わしている者達は、文民で

はなく、危機になれば軍隊を指導して戦場に立つ戦士であった。そして、これらの営為は叙事詩として語り継がれ、ローマの公的なものを支えることになる。

【注】

- (1) Arendt, Hannah, *The Human Condition*, The University Chicago Press, 1958, pp. 26-27.
- (2) Finley, M.I., *Politics in the Ancient World*, Cambridge, 1983, pp. 68-69. 但「フィニリーも、「戦争が古代の政治に及ぼした影響の大きさは、どれほど評価してもしすぎないほどだろう」と論じ、また、「原則的に、統治においては民政的部門と軍事的部門の区別はなかった」として、政治と戦争の関係を認めている。(p.58,60)
- (3) 司馬遼太郎『峠』（中）、新潮文庫、二五六頁
- (4) 大衆文化の中には、祖国や組織、親兄弟のために命を投げ出すことを美しく描くものがあり、それらは作者の意図にかかわらず、結果として国家のイデオロギー装置としての機能を果たすことになる。例えば、昭和三十年代、四十年代の少年漫画雑誌には、「0戦はやと」「紫電改のタカ」など戦記物があり、また爆弾三勇士、奉天入城などの記事が掲載されていた。
- (5) 『ヴィットマン』には第二次世界大戦のドイツの兵士についての以下のような記述がある。「彼らは大半が一九二三年〜二五年生まれの若者でした。(中略) その祖父は一八七〇〜七一年にセダンやマルス・ラトゥールで戦い、父は一九一四〜一八年にヴェルダンやアルゴンヌの森やフランドルで戦ったという世代です。タンネンベルクは学校の歴史の授業でおなじみの物語でした。つまり彼らにとって軍人として義務を果たすということはごく当たり前の、子どもの頃から慣れ親しんだ考えた方だったのです。」(パトリック・アグテ(岡崎訳)『ヴィットマン』(上)、大日本絵画、二〇〇五(六頁))
- (6) Arendt, op.cit., p.36
- (7) Rabe, Paul A., *Republics Ancient & Modern I*, The University of North Carolina Press, 1994. 特に第四章に古代ポリスが好戦的

な組織であったことが論じられている。

- (8) J.N.Figgis, *Political Thought From Gerson to Grocius*, Harper Torchbook, 1960, p.5. なお、これに絡めていえば、中世ヨーロッパの世界は、私権の集積であり、公的なものは存在していなかったから、従って政治的なものは存在しなかったという極論も有り得るが、そうした議論は、近代的な政治観念を一方的に中世に投影して見たものに過ぎず、近代主権国家体制が揺らいでいる現状を踏まえつつ、別の政治観念を投影するならば、中世にも政治的なものが存在していたことになるだろう。

- (9) カイヨワ、ロジェ (秋枝訳) 『戦争論』 (法政大学出版局、一九七四)、一五七頁

- (10) 共和政を敷くイタリア諸都市からシヴィックヒューマニズムが育ったとする捉え方は、H・バロン、J・G・A・ポークックにより大きな流れとなっている。「自分と都市国家との幸福な一致」という意識は確かに共和政の都市国家には存在した。(清水廣一郎『中世イタリア商人の世界』平凡社、一九九三、一四四頁) しかしそれらの諸都市は共和政といっても、実際に市民として政治に参加したり、実権を持つのは限られた者達であり、実状は寡頭制であった。また都市を防御する軍隊は傭兵が主力となりつつあった。(Waley, Daniel, *The Italian City-Republic*, World University Library, 1978; Martines, Lauro, *Power and Imagination*, The John Hopkins University Press, 1979)

- (11) 軍事革命という概念を最初に提示したロバーツは、その時期を十六世紀後半のオランダに求めたが、兵器の変化、戦闘の具体的状況などを具体的に検討することで、仮に軍事革命と呼べるものがあるとすれば、十五世紀、あるいは十七世紀に求めるべきという考え方が優位となっている。(Rogers, Clifford J., (ed) *The Military Revolution Debate*, Westviewpress, 1995、あるいは Black, Jeremy, *European Warfare 1600-1815*, Routledge, 1994)

- (12) ちあたり以下を参照。Bonney, Richard (ed. by) *Economic Systems and State Finance*, Clarendon Press, 1995.

- (13) 今日、世界に目を向けると、共和党を名乗る政党の幾つかが国権主義的な右派政党であることはこのことの傍証となるかもしれない。ドイツで共和党は極右の政党であり、フランスで共和派 (共和国連合) は、右派、保守層を代表し、アメリカの共和党は保守的と認識されている。

（14）現代共和主義について以下のような特徴が挙げられている。①私的なものと公的なものを結びつける、②審議への参加を重視する、③公民的徳性の陶冶を重視する、④シティズンシップに関心を持つ、⑤自我をアイデンティティによって構成される存在として捉える、⑥自己統治を自由として考える、⑦古典古代のギリシアに政治の本質を求める、⑧法制化の要求をもつ。（大森秀臣『共和主義の法理論』勁草書房、二〇〇六、四四頁～五一頁）古代ギリシアが政治の理想として掲げられるとき、市民が同時に兵士であったことはしばしば看過される。

（15）共和政の意味を、政治参加とそれを通じた公共道徳の涵養に求める論者が多い中で、ペティットは、共和政は、主人と奴隷との対比で、主人的な自由を実現していることであると論じ、参加や市民的徳の涵養を中心に共和主義を構想する、従来の共和主義像とは異なる像を提示した。（Petit, Philip, *Republicanism*, Oxford, 1997.）

（16）J・スコットは、オランダの共和主義は平和と繁栄を求めたのに対してイギリスの共和主義は好戦的であったと対比している。Scott, Jonathan, *Classical Republicanism in Seventeenth-century England and the Netherlands*, in *Republicanism A Shared European Heritage* vol I, ed. by Martin van Gelderen, Cambridge, 2002, pp.70-71

（17）参加とそれを通じた市民的徳の涵養という視座は、好戦的な共和政と通底しやすい。ヴィローリは、ペティットの議論を継承しつつ、共和主義の重要な構成要素として政治的自由を挙げるが、それでは十分ではなく、市民的な情熱が必要であると論じ、「共和主義の理論家達が数世紀に渡り一貫して繰り返してきた政治的知恵は、自由は、市民的徳と呼ばれる特別な情熱が存在して始めて保持されるということだ」と述べている。（Viroli, Maurizio, *Republicanism*, Hill and Wang, 2002, p.12）ヴィローリの議論に典型的に現れているように、共和政を称揚する議論では、市民的徳の涵養が常に掲げられてしまう。

（18）千葉真『ラディカルデモクラシーの地平』（新評社、一九九五）

（19）詳しくは第三節以降に触れるが、まずは以下を参照。Tilly, Charles, *Coercion, Capital, and European States*, Blackwell, 1990. Porter, Bruce D., *War and the Rise of the State*, Free Press, 1994

（20）総力戦体制の延長上にグローバル化を捉えるものとしては、『山之内靖編『総力戦体制からグローバリゼーションへ』（平

凡社、二〇〇三)。本稿は両者を断絶の相から見る。尚、第一章第三節以降は、次号以下に譲る。

(21) シュミット、カール (田中訳)『政治的なものの概念』(未来社、一九七〇)、一九頁、三六頁

(22) 富永健二『行為と社会システムの理論』(東京大学出版会、一九九五)の第四章にシステム論についての簡潔な整理がある。ルーマンのシステム論については、以下を参照。馬場靖雄『ルーマンの社会理論』(勁草書房、二〇〇一) パーソンスの AGU モデルを政治理論に転用して成功した例としては、S・ロツカンが夙に知られている。(篠原一「歴史政治学と S・ロツカン」、『戦後デモクラシーの成立』岩波書店、一九八八所収)

(23) A・ギデنزとは、社会の変化の結果、かつての機能をもはや果たさなくなった諸制度を貝殻制度 (shell institutions) と呼んだ。(Giddens, Anthony, *Runaway World*, profile books, 1999, p.19, 58.) ギデنزによれば、グローバル化の進展により、婚姻、家族についての諸制度も貝殻制度化している。

(24) アリストテレスの枠組みにそのまま従えば、配分的な正義がまず実現されねばならない。従って、政治を経済システムに対しての矯正的正義を実現するものと措定するならば、経済システムに、配分的な正義に類似した何か正義を実現する機能が必要になる。市場社会批判の議論では、経済システムは利益のみによって評価が決するシステムであり、利害以外の評価基準はないということになる。ルーマン的なシステム論でもそれは同様だろう。本稿で経済関係を協働関係と措定したのは、利害を単一の軸とする経済システムという捉え方よりも広く経済関係を解釈したいという動機に基づいている。

(25) 公的なものは、主権に由来する領域と置く捉え方と、他方で、複数の人々に共通に関わる事柄、あるいは複数の人々の眼前に立ち現れるものと考え、二つの捉え方が大きく分ければ存在する。前者と捉えれば、公的なものは、議会、行政府など主権国家の諸作用と専ら関わり、後者と捉えれば、交通機関、街路、劇場など、複数の人々が集まるところは常に公的な場となる。本稿は後者の立場に依拠する。

(26) バーガー、ピーター・L (藺田訳)『聖なる天蓋』(新曜社、一九七九)、三三二頁

(27) オットー、ルドルフ (華園訳)『聖なるもの』(創元社、二〇〇五)

- (28) エリアーデ、ミルチャ(風間訳)『聖と俗』(法政大学出版局、一九六九)
- (29) ジェイムズ、W(榊田訳)『宗教的経験の諸相』(岩波文庫、一九六九)。特に第三講でこの点は詳細に議論されている。
- (30) 大野晋『日本人の神』(新潮文庫、二〇〇一)
- (31) カイヨワ、ロジェ(内藤訳)『聖なるものの社会学』(ちくま学芸文庫、二〇〇〇)
- (32) Rahe, Paul A., op.cit., p.93
- (33) 完全市民によってのみ戦われる戦争、戦争での役割が権力に正当に直接的に反映される統治制度などはプラトンやアリストテレスの著作や多くのギリシア人の想像力を支配したが、実際の世界では、戦争と地位と権力の関係は、それほど綺麗で単純ではなかった。全ての社会階層が常に戦争では、騎兵、船長、重装歩兵、船員、軽装歩兵、漕ぎ手であれ、何らかの役割を担っていた。』*Greek Warfare — Myths and Realities*, Jans van Wees, Gerald Duckworth & Co.Ltd, 2004, p.85.
- (34) Hanson, Victor Davis, *The Wars of Ancient Greek*, Cassell & Co, 1999, p.52. 重装歩兵の密集戦術については以下を参照。
Hanson, Victor Davis, *The Western Way of War*, University of California Press, 1989.
- (35) Warty, John, *Warfare in the Classical World*, University of Oklahoma Press, 1995, p.37
- (36) クセノフォンの『ヘレニカ』『アナバシス』には戦闘についての記述が随所に見られる。以下は『アゲシラオス』での描写である。「両者は、楯をおつけて、突き戦い、戦い突き、生死の明暗の中にあつた。叫吠は無かったが、沈黙があつたわけでもなく、荒れ狂う戦闘が発散させるような奇妙で押し殺した声があつた。」(Xenophon (tr. by Dakyns) *Agessilus*, Lightning Source UK Ltd, p.13)
- (37) 『平和』『ギリシア喜劇全集』(人文書院、一九七二)、三八六頁
- (38) 但し『エウデモス倫理学』では、市民軍的な勇氣は恥辱によるがゆえ本当の勇氣ではなく、真の勇氣は、その行為が美しいから選ぶ、というものでなければならぬと論じられている。
- (39) ローマの制度については以下を参照。J・ブライケン(村上・石井訳)『ローマの共和政』(山川出版、一九八四)、E・マイヤー(鈴木訳)『ローマ人の国家と国家思想』(岩波書店、一九七八)

- (40) Dominik, William J., *Roman Eloquence*, Routledge, 1997, pp5-6.
- (41) *ibid.*, p112.
- (42) Goldsworthy, Adrian, *The Complete Roman Army*, Thames & Hudson, p.43
ローマは市民軍であり、カルタゴは傭兵も用いていた。市民軍であったローマの方が好戦的であったことは示唆的といえよう。
- (43) Santosuosso, Antonio, *Soldiers, Citizens & the Symbols of War*, Westviewpress, 1997, pp.158-159
- (44) Goldsworthy, Adrian, *Roman Warfare*, Cassell & Co., 1999, p.81.
- (45) *ibid.*, pp.90-91.
- (46) Livy, *Rome and Italy*, Penguin Classics, 1982, p.170
- (47) *ibid.*, p.328

(ます のぶお・本学法学部教授)